

読書会BB カール・バルト「キリスト教会の宣教の困窮と約束」

加藤常昭先生訳 読書会

L323～ パレフレーズの試み

太字：加藤先生訳「キリスト教会の宣教の困窮と約束」の本文

斜体：パラフレーズの試み

※：質問、疑問と答え（下線があるのは、加藤先生の回答）

三

さて、しかし、状況とは、何を意味するのでありましょうか。

教会の宣教（礼拝）で何が起きているのでありましょうか。

あの期待が指し示している出来事とは、いったい、いかなる出来事でありましょうか。

日曜日の鐘がなり、礼拝堂に集められる牧師や会衆の中にある期待、彼らが意識しようとしまいと、礼拝という現実の中に横たわる期待は、いったい如何なる出来事を期待しているのでしょうか。

期待は、しかし、その出来事の中に、自分を反映させているのであります。

礼拝に集められる、という状況の中に横たわる期待は、そこで起こる出来事と密接に関係しており、起こる出来事の中に、人々が期待しているその事が映し出されています。

この関連において、「神が臨在される」とは、何を意味するのでありましょうか。

このように礼拝に対する期待がある中で、「神が臨在される」とは、どういう意

味があるのでしょうか。

私どもが、花咲く桜、ベートーフェンの第九番の交響曲、国家、あるいは、私どもの、あるいは他の人びとの尊い日常の仕事に、同じ語り方を適用することを許されるだろうとするのも、同じようなことなのではありませんか。

※「桜」は自然、「ベートーベン第九番交響曲」は芸術、「国家」、「尊い日常の仕事」はそのまま。これらのリストは、L337 から、「わたし達が生きることの意味を見出すことのできそうなもの」と言えるのではないか。

※「同じ語り方を適用すること」とは、“そこにおいても「神が臨在されている」という期待を持ち込むことができる、と語れるのではないか”ということだろうか。これらの事物についても、礼拝と同じように語れるのではないか…ということとか。

私たちが、教会の宣教（礼拝）以外の事柄、自然、芸術、国家、日常の働きなど、生きることの意味を見出すことができそうなものの中に「神の臨在」を問うこともできるのではないのでしょうか」

そうでなければ、これらは余計なことをしていることになるのではないのでしょうか。

※「これら」は複数形なので、「桜」「第九」「国家」「日常の仕事」のことか？

『神の臨在』を問い、それを経験する、という奇蹟がないのなら、自然や芸術や

国家や日常の仕事は、無意味なことになるのではないか。

まさしくこの状況に備わる特殊なるものが、ある特別な、ひとつのこと、特殊であり、より大胆な思いで語られる「神は臨在される！」ということ、なぜ目標にしていない、ということがあるであらうでしょうか。

いやそうではなくて、「この状況」教会の宣教（礼拝）に備わる特殊で特別な一つものがある。それは、桜や交響曲や国家や日常の仕事など、礼拝以外の事柄を通してよりもより大胆に「神は臨在される！」と語ることを、目標としていない、何てことはあり得ない。

こうなのではないでしょうか。この状況の中へ、人間が身を置こうとしますならば、つまり教会堂に入ろうとしますならば、そこで人びとは、知ろうと知らなかりと、桜、交響曲、国歌、日常作業、その他もろもろのものを、何らかの仕方で消耗し尽くした可能性として、背後に置いてきているのであります。

日曜日の朝、礼拝するという状況の中へ、人間が身を置こうとするのなら、意識しようとしまいと、自然や芸術、国家や日常生活等という、礼拝以外の全てのものを、そこに神の臨在の可能性を見出せないものとして除外して、礼拝にのみ神の臨在を経験する可能性を期待するのです。

答えは、こうであります。神は臨在される。このことは、これらのすべての可能性のなかに、疑いもなく、与えられていることであります。これらの事物の真理内容であります。

答えはこうです。神は臨在される、確かに、自然、芸術、国家、日常作業を通じて、神の臨在を見出す可能性は確かにあります。これらの事物の真理です。

だが、生きることの意味を語るその証言は、またもや疑わしいものとなりました。

しかし、私たちがそれらの中から真に「神は臨在される」と事を見出して行う証言は、疑わしいものとなります。明確な証言ではなくなります。

現存在の大きな謎であります。私どもを取り囲む自然の、理由がわからない無言であります。

それらの中に神の臨在を見出す証言が疑わしいのは、現存在の謎です。私たちを取り囲む「あるがまま」の状況は、私たちに、何故それらから、神の臨在の確かな証言を得ることができないのか、という事については何も語ってくれません。

個々の、時間の中に存在するすべてのものの偶然性であり、闇であります。諸民族と個々人の苦悩であり、運命であります。根元悪、死です。

時間の中に存在するものは、その連関を明確に理解できない偶然性をもっている、とも言えます。よく分からない、闇があります。ありのままの状態（自然の状態）では、「神は臨在される」という明確な確信が得られないために、諸民族と個々人の苦悩がありますし、それは、人間の運命とも言えるでしょう。ありのままでは、神の臨在を確信できないことは、根源悪であり、「死」そのもののなのです。

これらは何度もやってきます。

偶然性、闇、諸民族と個々人の苦悩、運命などを、私たちは何度も経験します。

そして語ります。私どもに、神が臨在されることを確かなこととしてくれる全ての声よりも大きな声で語ります。

そして、私たちに語ります。「神は臨在されるのは、確かなことだ」と語ってくれる声よりも、大きな声で語ります。（「神はいないかもしれないぞ」と。）

問いはもはや抑えつけることはできません。ますます燃えるように熱くなってきました。いったい、それは本当のことなのでしょうか。

そのような大きな声に取り囲まれているから、私達の疑惑はもはや抑えつけることはできません。「いったい、それ（神は臨在される）とは本当のことなのでしょうか」と問わずにはいられないのです。

散らされている者たちがひとつにされるとの予感^①は真実なのでありましょ
うか。

礼拝でもたらされる「散らされている民が一つになる」との予感^①は真実で
しょうか。

諸現象の流れの中に、静かに存在する極があるとの予感^①は真実なのでありま
しょうか。

様々に変わっていく諸現象の奥に、永遠に変わらぬ「極」がある、という予感^①
は真実でしょうか。

もろもろの星の背後のどこかに義があるとの予感^①は真実なのでありましょ
うか。

もろもろの天体の存在の背後には、義、それらを造り存在せしめている「義」
があるのではないか？という予感^①は真実でしょうか。

※「極」とか「義」には、哲学の背景があるのでしょうか。

⇒22/12/6 加藤先生：当時、そのような用語を使った神学論争があった。

そうではなくて、今や、一挙にして私どものいのちとなっている、あの出来事
のなかで、地上を覆う天を予感するもののところにやって来るのであります。

いえ、そうではありません。今や既に、一挙に、私たちを真実に生かし私達の
命となっている「あの出来事」（キリスト・イエスの出来事）の中に、古い地
上世界を覆う神の支配を予感する者の所に、「神は臨在されるのは真実です
か」という問いがやって来るのです。

日曜日の朝というグロテスクな状況のすべての中へ身を委ねるのであります。
そして、「神は臨在されるのは真実ですか」という問いは、日曜日の朝の奇怪
な状況、礼拝で行われる全ての中に入り込み、答えられるのを待つのです。

この状況こそ、先ほど語った可能性の潜在的な表現であります。

このような礼拝こそ、「神は臨在されるのか」という問いに答えることができ
るという可能性を、密かに有しているのです。

よくお分かりになったでありませんか。

人びとが聴き、認識し、知りたいと思っているのは、単なる主張、見解披露というような言葉だけを聴きたいのではありません。しかも、その人びとがまさに内的であり、靈感を受けていればなおさらであります。人びとが聴き、認識し、知りたいと思っているのは、それは本当ですかということなのであります。つまり、ほかのいかなることでもないのであります。それは、ちょうど猫が、この熱いお粥のまわりでうろうろしているようなものであります。

よくお分かりになったでしょうか。

人びとが聴き、認識し、知りたいと期待しているのは、牧師の何某かの主張や見解を語るだけの言葉ではないのです。（日曜日の朝集まってくる）人々が内的であり、靈感を受けていれば猶更です。人々が聴き、認識し、知りたいと思っているのは、「それは本当ですか」ということであり、他の如何なるものでもありません。ちょうど会衆は熱いおかゆの周りをうろうろする猫のようです。（「神は臨在している」ということを確かに確信したいのに、あまりにもその問いに向かうとやけどしそうで、直接確かめることができず、さりとて、立ち去ることもできず、どうしてよいか分からずにいるのです。）

く—————12/6はここまで

L357

このような人間の欲求が聞かれるのは稀であるとか、それほどの切実な願いに出会うのはほとんどないなどということで、私どもが間違いを犯さないようにいたしましょう。このようなことを人間が単純に叫び出すことは、もちろん、ないことなのであります。私ども牧師たちの耳に囁いてくれることもないのであります。しかし、人びとが沈黙しているからといって、錯覚を抱かないようにいたしましょう。

『神は臨在するとは本当ですか』という問いを聴くことは稀である、とか、強く切実に『神は臨在するのは本当ですか』という問いの答えを知りたがることは殆どない、等ということで私達は間違いを犯さないようにいたしましょう。このようなこと（「神が臨在する、というのは本当ですか」というような問い）を、人間が直接そのままの問いで叫び出すということは、勿論ありません。私たち牧師の耳に小声でささやいてくれることもありません。しかし、人々が沈黙している（この問いを発してはいない）からと言って、（「それは本当ですか」という問いを発していない、とか、その答えを求めていないというような）錯覚を抱かないようにしましょう。

血と涙、最も深い絶望と最高の希望、あのこと、いいえ、あの方を捉えたいという情熱的な願いであります。

(錯覚ではなく人びとは確かに抱いています。) 血涙を絞るような最も深い絶望と、そして最高の希望であるあのこと、あの出来事、いや、あの方を捉えたい、という情熱的な願いを、人々は抱いているのです。

※何故、「血と涙」という比喻を用いるのか。「血涙」：激しい怒りや悲しみのために流す涙。「血涙を絞る」に関係あり？

世界の創造者であり、救済者であられるが故に、世界を克服される方であります。初めであり、終わりであり、世界の主であられる方を捉えたいのであります。自分にみ言葉を語り聞かせてほしい、という情熱的な願いであります。審きにおいて恵みを約束してくださるみ言葉であります。死、におけるいのち、此岸における彼岸、すなわち神の言葉であります。

世界の創造者であり、救済者であるが故に、世界（の闇の現実）を克服（し全く新しく）される方、初めであり、終わりであり、世界の主であられるお方を捉えたいのです。それは「自分にみ言葉を語り聞かせてほしい」という情熱的な願いです。（どんなみ言葉でしょうか。）審きにおいて恵みを約束してくださるみ言葉、死においていのちをもたらすみ言葉、此岸における彼岸の言葉、つまり、神の言葉（を人々は聞きたいと願っているの）です。

L 3 6 8 ~

つまり、これが、私どもの教会に通ってきてくれる方たちの背後にあるものであります。

つまり、これ（「わたしたち牧師に神の言葉を語って欲しい」という情熱的な願い）が、私たちの教会に通ってきてくださる方たちの背後にあり、その方たちを礼拝に押し出してい）るのです。

人びとが望んでおりますものは、いわゆる現実におきましては、まだ眠っているかもしれません。

この情熱的な願いは、いわゆる現実、（つまり、まだ目に見える形では現れてきておらず、まるでその人の内で）眠っているか（のように、本人も気づいていないか）かもしれません。

まだ市民的で、まだごく通常のこととして現れているかもしれません。

(ストレートな願いではなく、一見、神の言葉とは関係なさそうな、) 市民的なこと、この世的に普通なこととして、(この願望は) 現れてきているかもしれません。

現実にお勧めできないのは、人間の前終末的な、あるいは前前終末的な欲求を頼りにしてしまうことであります。

(しかし、だからと言って、これらの人びとの潜在的な願いに対し、私たち牧師が、) 「終末より前の、或いは、全く終末的ではない、つまり、この世の現実

に即した現世的な人間の欲求を当てにし、(これを満たすような言葉を) 語ることは、現実的にお勧めできることではありません。

私どもがそれをしたからと言って人びとは感謝などしないであらうでしょう。

私たち牧師がそれ(終末的でない現世的欲望を満たすような言葉を語ること)をしたからと言って、人々は感謝などしないでしょう。

人びとが望んでおりますのは、自分たちが自分を理解する以上に、私どもが人びとをよく理解してあげているということでもあります。自分たちが自分たちを真剣に受け止める以上に、私どもが人びとを真剣に受け止めてあげることでもあります。

人びとが望んでいるのは、自分達が自分自身を理解する以上に、私たち牧師が人々をよく理解するということです。自分達が自分自身を真剣に受け止める以上に、私たち牧師が人々を真剣に受け止める、ということです。

人びとが傷ついて私どもを訪れる時、その傷に手を突っ込んでしまうからと言って、私どもに愛がないということにはなりません。

人びとが傷ついて私達牧師のもとを訪れる時、その傷に手を突っ込むように(深く知ろうとする)からと言って、私たちに愛がない、ということにはなりません。

そうではなくて、人びとが私どものところに来たのはなぜかを私どもが知らないかのごとく、人びとを軽くあしらったりすれば、愛がないということになるのであります。

そうではなくて、人々がわたし達のところに来た理由、「神が本当におられるのか」と言う事を知りたくて来たことを、私たちがまるで知らないかのごとく、人々を軽く表面的にあしらったりするのなら、それこそ、愛がない、とい

うことになるのです。

人びとが私どものところに来るのは、終局的な、最も困難な問いに衝き動かされてのことだと想定したからと言って、私どもが幻想を抱いていることにはなりません。

人びとが、私たち牧師のところに来るのは、終末的な、最も答えるのに難しい問いかけに衝き動かされて来た、と私達が想定しても、幻想を抱いている事にはなりません。

そうではなくて、人びとが私どものところにやって来ましても、前終末的な答えを与えて、食べ飽きさせてしまうようなことをすれば、幻想を抱いていたことになるのであります。

そうではなく、人々がわたし達のところへやって来ても、彼らが通常聞くことのできるような終末とは何の関係ない、現世的でなおざりな答えを与え、彼らに「聞き飽きた、食べ飽きた」と言うような想いをさせるのであれば、私たちは（彼らの願望の現実を視ず、）幻想を抱いていることになるでしょう。

おお、そうです。

人びとは、もちろん、暫定的にそれをするのであります。

勿論、人々は、「とりあえず」というように、暫定的な答えを求める気持ちで、私たちの所に来るのです。

※「それをする」とは、何だろうか。「私達牧師の所に来ること」と理解したがよい。

自分たちが、本来、求めておりますものを見つけておりません。

自分達が本来求めているものを、まだ発見していないし、自覚もしてはいないのです。

でも、心を動かされ、喜ばされ、満足させられるということはあるのであります。

しかし、それでも、心が動かされ、喜びが与えられ、満足させられるということはあるのです。

基本的には、ほかのところでも見つけられたものではありませんが、（おそらく、宗教的、キリスト教的、保守キリスト教的など、さまざま形式において）見出だし得たかもしれないのであります。

それは、基本的には、（本来の場所（礼拝）ではなく、）他のところでも見つけられたものでありましょうが。人間が行っている「宗教的」「キリスト教的」「保守キリスト教的」な様々な形式の儀式としての営みの中で見出し得たものかもしれません。

※「保守キリスト教的」とは？

いずれにいたしましても。カトリシズムは、この点でうまくやっている強力な例であります。人びとをつなぎ止め、子守唄を歌って聞かせ、ひとつの、さいわいにも選ばれました、究極の暫定的なものを提供して、人びとが本来求めているものを忘れさせるのに成功しているのです。

いずれにいたしましても。カトリシズム（カトリック教会の思想的立場、カトリック主義）は、この点（、つまり「宗教的儀式の営みの中で人々の間に答えるように見せる」点）で、うまくいっている非常によい例です。人々をつなぎ止め、赤子に子守歌を聞かせるように不安を鎮め、多くの中から選ばれた一つの、究極的に見える暫定的なものを提供し、人々が本来求めている「神はここにいらっしゃるのですか」という問いの答えを求めるのを忘れさせるのに、成功しています。

※「究極の暫定的なもの」― “究極”とは終末に属するという意味の「究極」か、それとも、“極めて”を強調した意味の「究極の」か。

しかし、錯覚を抱かないでいただきたいと思います。私どもはカトリックではありません。もろもろの教会共同体もそうではありません。私どもがおります状況は、もう少し進んだ段階の状況であります。

しかし、錯覚を抱かないでいただきたい。（彼らはともかくとして少なくとも）私たちは、カトリックではありません。諸々の教会共同体もカトリックではありません。私たちがいる状況は、カトリックよりも少し進んだ段階なのです。

この段階におきまして、最もよく選ばれた麻薬を提供し、どんな後退現象があろうとも、ほんの部分的であり、ほんの短期間でありましても成果を挙げることができているのであります。

私たちがいる段階においては、よりすぐりの麻薬を提供して、どんなに後退している状況があったとしても、それはほんの部分的なものです。（カトリックに比べて）とても短い期間ですが、成果を挙げることができているのです。

だが、善意の人が、私どもが自分の仕事をうまくやっているではないか、と保証してくれても、信用しないようにしましょう。私どもの技巧の全てが、状況の意味を回避することに成功したと言われても同じことであります。状況を深刻なものにしないでくれと、悩みつつ警告してくれる人の声にも耳を傾けないようにしましょう。私どもが、通常は的に当たる射撃などしないのに、これらは必ず当たるようになさいなどという声にも耳を傾けないようにするのです！

しかし、善意の人が、私たち牧師が自分達の“仕事”（牧師の職務）をうまくやっているではないですか！と評価し保証してくれたとしても、信用しないようにしましょう。私たちが持てるテクニック全てを使って、「礼拝という状況の意味する所（『神は本当におられるのか』）という真剣な問いが発せられ、それに応えられるべき、ということ）を回避（し、人々を暫定的な答えに満足させているの）に成功したと言っても、同じく信用しないようにしよう。

「（礼拝という）状況を、そんなに深刻なものにはしないでください」と悩みながらも警告してくれる人の声にも耳を傾けないようにしましょう。私たちは、通常、射撃しても的に当たることなどめったにないのに、「これら牧師の職務では的に射るようになさい」という声にも耳を傾けないようにするのです。

これらの声が語り出しているのは、神の教会の声ではありません！私どもの場合状況が真剣に意味するところは、人間が、み言葉を聴くことを欲するということであります。それは即ち、それは本当ですか、という問いへの答えに、知ってか知らずか、人びとは動かされているのである、ということでもあります。

これらの声が語り出していることは、神の教会が語ることはありません！私達の場合、（礼拝という）状況が真剣に意味するところは、人間はみ言葉を聴くことを（根源的に）欲する、と言う事です。それは、即ち、「それ（神が生きておられ働いておられる）は本当ですか」という問いへの答えに、意識してか無意識かに拘わらず、人々は動かされているのだ、と言う事なのです。

※つまり、礼拝で『み言葉を聴く』ということが、「神が生きて働いておられるのは本当ですか」という問いへの答え（神は臨在される）に動かされている

証と言う事？

日曜日朝の、この状況は、終局の歴史であります。終末論的であります。聖書の視点においてということはしばらく全く無視し、人間の視点からだけ見ましても、そうなのであります。ということは、この状況が入り込めますと、そこでは歴史、その出来事以外の歴史が終わる、ということでもあります。

日曜日の朝、人々が『神は果たして臨在されているのか』という問いをもって教会に集まり礼拝するという状況は、終局の歴史です。終末論的出来事です。聖書の視点から、ということは全く無視して、人間の視点だけで見てもそうです。つまり、この状況、『神は果たして臨在されているのか』という問いをもって教会に集まり礼拝するという状況が人間の歴史に入り込んでくると、そこで人間の歴史、神の臨在のもと礼拝するという出来事以外の歴史は終わりを迎える、と言う事です。

そして、終局の出来事を求める人間の究極の願いが尺度になるということでもあります。私どもが、この究極の願いを理解していないとなりますと、その現実存在が窮迫の状況にあるのに、その人間を私どもが真剣に取り上げていないということになるのであります。

そして、その時、歴史の終局の出来事を求める人間の究極の願いが（ものごとの真剣さを計る）尺度になります。私たちが、この人々の究極的な願いを理解していない、というのなら、それは、人間の現実存在の困窮が切迫しているにも拘わらず、私たちがその現実を真剣に取り上げていない、と言う事になるのです。

この窮迫状態こそ、人びとを私どものところに導いたものであります。（繰り返して申しますが、人びとが自分を真剣に取り上げるのにまさって、真剣に取り上げてあげる、のであります！）

（人々の）この困窮状態が、私達の所へと導いたのです。（繰り返しますが、人々が自身を真剣に取り上げるよりそれ以上に真剣に、私たちは彼ら自身を真剣に取り上げるのです！）

そうすると、私どもが不思議がることは許されないのでありますが、大勢の人びとが、敢えて教会の敵とまではなりません、徐々に学び始めておりますの

が、教会を袖にし、私どもを、善意の人びと、不安を抱く人びととだけと一緒に
にして、取り残して去って行くということでもあります。

そう（私たちが、彼ら以上に彼らのことを真剣に取り上げないと）なると、不
思議に思うことは許されないことですが、人びとが、教会の敵となるとまでは
いきませんが、教会を袖にして、私たちを、「善意の人びと」や「不安を抱く
人々」と一緒に残して、教会を去っていく事が起こるでしょう、それは大勢の
人びとが既に学び始めていることです。

※「善意の人びと」の具体的な内容は？お人よしっていうこと？偽善者ってこ
と？

※「不安を抱く人々」というのは、不安症の人びとということ？

そこで、何度も繰り返されることでありますが、目覚めさせられた牧師の息
子や神学者の息子たちまでもが、この静かな避難民の群れに積極的に参加して
おりますことは、いわば、ただ心理学的に条件づけられてのことではないでし
ょうか。あるいは、この子息たちは、近くにいるものですから、本来求められ
ているものが何であるかを知ることから、こういうことが生じてい
るのかもしれませんがね。

そこで、何度も繰り返されていることですが、この事に目覚めた牧師の息子
や神学者の息子たちまでもが、この静かな教会からの避難民の群れに自分から
加わっています。それは、心理学的な条件づけだけで説明できる事なのでしょ
うか。或いは、この子息たちは、（牧師や神学者の）近くにいる者達ですか
ら、本来、牧師や神学者が求められているものが何であるか知っており、だか
ら、彼らも又教会からの避難民の群れに加わる、と言う事が起きているのかも
しれません。

人びとは、私どものところで、それを見出すことが困難になっているのであ
ります。

人びとは、私たちのところで、それ（神が生きて働いておられる事を証しす
る神のみ言葉が聴けるという終末論的出来事）を見出すことが困難になってい
るのです。

こんな言い方をしても、少なくとも、私の言い分に正しいところもあるので

はないであらうか。

こんな言い方をしても、私の言い分にも、正しい所が少なくとも部分的にはあるのではないであらうか。

人びとは、私どもに幻滅を覚えているのであります。しかも教養のあるひとと教養のないひとと同じであります。その最も深いところにおいて幻滅しているのであります。この人たちは、あまりにもしばしば、おそらく既に何世紀にもわたって間違った食べ物で食べ飽きさせられたのではないであらうか。人びとを歓迎してあげようという、まさに善意のこもった意図によって、その人たちの脇を通り過ぎるような語り掛けばかりされてきたのではないであらうか。

人びとは、私たち牧師に幻滅を覚えているのです。教養ある人も教養のない人も等しく幻滅しているのです。それぞれの最も深いところにおいて幻滅しているのです。この人々は、あまりにも頻繁に、おそらく、今まで何百年の間にわたって、間違った食べ物ばかりを与えられて食べ飽きさせられたのではないであらうか。「人々が喜ぶようなものを与えて歓迎してあげよう」という善意のこもった意図により、実はその人たちの（願望の核心を突くことなく）脇を通り過ぎるような語りかけばかりされてきたのではないであらうか。

思い込んでいるだけの人間愛から、何度も新しく間違った食べ物で食べ飽きさせようなどと考えないで、一度よく考えるべきではないであらうか。人びとは、教会の中で、全く単純になかなか穏やかにならない不安のなかにある自分たちが真剣に受け止められ理解されることを期待しているのではないかと。

人びとは、通常（メソジストや共産主義者の集会、人智学の集会で）体験している以上に、ここ教会においてこそ、より真剣に受け止められ、理解されることを待っているのであります。

思い込んでいるだけで（神がおられる事の証にはならない）人間愛を語り、何度も何度も間違った食べ物で食べ飽きさせよう等と考えるのではなくて、一度よく考えるべきではないであらうか。「人々は、教会の中で、なかなか、ただ単純に穏やかになれない不安の中にある自分達（の言葉にならない願望）が、真剣に受け止められ理解されている事を期待しているのではないかと」。

人びとは、通常（メソジストの集会や、共産主義者の集まり、人智学の集会

など) 以上に、教会においてこそ、より真剣に受け止められ理解されることを待っているのです。

十分に驚くべきことですが、人びとは、私どもから、少なくとも、洗礼を受け、堅信礼を受け、結婚の司式をしてもらい、更に葬りをしてもらい、そのことによって、自分たちが私どもに寄せている期待がまだ完全には消えてはいないことを示してくれているのであります。同じように十分に驚くべきことは、依然として各個教会があり、また地域共同体としての教会がちゃんとあるということでもあります。

これは十分に驚くべきことですが、人々は、なおも、私たち牧師から、少なくとも洗礼を受け、堅信礼を受け、結婚の司式をしてもらい、更に葬りをしてもらいます。そうして、彼らが私達に寄せている期待がまだ、完全には消えていない事を示してくれているのです。同様に、十分驚くべきことは、依然として各個教会が存続し、また地域共同体としての教会がちゃんとある、と言う事です。

ところで、これらのものが、もしなかったとすれば、もっとよかったのかもしれませんが。そうすれば、結局のところ、鐘が鳴った時に、それが何を意味したかに気づいたであろうと思います。

ところで、これらのもの(教会や教会で行われる社会的ニーズを満たす諸々の儀式)がもしなかったとしたら、もっと良かったのかも知れません。もしなかったとしたら、日曜日の朝、鐘が鳴った時、その鐘が何を意味するか人々が気づいたであろうから。

しかし、私どもは、神の寛容によって、悔い改めを差し控えるようなことをさせられてはいないのであります。この神の寛容は、民衆が眠りこけているということだけにおいても、私どもに示されているのであります。そして、この悔い改めこそ、今日の人間を考えてみますと、今の時代の第一の戒めであり得ると思われまふ。

ですが、私たちは、神の寛容によって、悔い改めを積極的に勧められているのです。民衆が神の出来事に気付かず眠りこけている状況を神が看過している、と言う事だけでも、私たちにこの神の寛容が示されています。そして、この悔い改め

る事こそ、今日の人間を考えてみれば、今の時代の第一の戒め、つまり、真の神のみを神とせよ、という戒めでありうるように思われます。